

誇張表現としてのホド構文

井 本 亮

1. はじめに

本稿の中心的な考察対象は次の(1)のような例である。

(1) 夏子が [く病気になるく ほど] 働いた

(1)では、「ほど」が主要部となって補部「病気になる」をとり、全体で副詞句「病気になるほど」を構成している（角括弧部分：これを「ホド句」と呼ぶ）¹⁾。本稿ではホド句が主節と副詞的修飾関係を構成している動詞述語文を「ホド構文」と呼び、ホド句補部（山括弧部分）に現れる節を「ホド節」と呼ぶ。

本稿ではこのホド構文の構文的特徴、特にその誇張表現としての用法の背景にある構文的性質を明らかにすることを目標とし、以下の要領で議論を進める。まず、副詞的修飾関係としての特徴を概観し（2節）、ホド構文に特徴的に見られる「死ぬほど食べた」のような比喩的誇張解釈がホド節と主節の間の意味的關係に起因することを例証する（3節）。また、ホド構文と類似したマデ構文との異同についても観察を行う（4節）。次に、このような比喩的誇張解釈が英語では結果構文という別の構文に見られること（5節）、それが〈使役行為〉という認知的スキーマを基盤とした表現であることをみる。そして、日本語の結果構文にはそのような拡張的用法がない一方で、ホド構文が〈使役行為〉と同様の構文スキーマを利用した構文と捉えることができることを論じ、誇張表現としての特性からホド構文と結果構文を位置づける（6節）。最後に本稿の議論をまとめる（7節）。

2. ホド構文の特徴

本節では、ホド構文に見られる意味的特徴を概観しておきたい。ホド構文はホド句と主節との副詞的修飾関係と捉えることができる。ただし、ホド句を構文成分として分類法的に規定することは必ずしも建設的ではなく、次の(2)に見られるようにホド句は程度・情態・数量・頻度の間で横断的に位置づけられる。

- (2) a. 春夫が痛くなるほど日焼けした (程度修飾成分)
 b. 夏子が春夫の背中を手の跡がつくほど1回叩いた (様態修飾成分)
 c. 秋絵が救急車で運ばれるほど焼酎を飲んだ (数量修飾成分)
 d. 冬美が飽きるほどディズニーランドに行った (頻度修飾成分)

(2)の例からも分かるように、ホド句がどのような副詞的成分であるかはホド句と主節がどのような修飾関係を構成したかによって決まり、そしてどのような修飾関係であるかは、主節の概念的意味による。(2) a. のホド句が程度修飾成分と解釈されるのは主節が程度概念を含意する状態変化事態を表すからであり、(2) b. のホド句が様態修飾成分であるのは主節が変化を含意しない単一事象を表すからである。

ただしホド句の意味は全く透明なのではなく、奥津(1986)がホド句の用法を「非常の程度」と名づけたことから分かるように、程度副詞の「非常に」に相当する程度、様態副詞の「強く、激しく」に相当するサマ、数量詞の「大量に」に相当する数量、頻度副詞の「何度も、繰り返し」に相当する回数性を表す。要するに、ホド句の修飾対象は程度・情態・数量・頻度などの諸概念であり、修飾限定の解釈はその程度・サマ・数量・回数によらず一律に「極度」であることを表すのである。

このような性質から、ホド句は関数的性質を持つと考えることができる。ホド句は修飾対象の意味概念を変数として取り、その意味に応じた修飾関係の値を返すのである。この値を仮に〈極度〉とすると、副詞的成分ホド句の意味は次のように規定できる。

- (3) ホド句の意味 = f 〈極度〉(x) (x: 修飾対象の概念的意味)

副詞的成分の用法が被修飾成分の概念的意味によって規定されることは、多くの先行研究によって異口同音に指摘されてきたことである²⁾。その点で、語彙の意味に固定されないホド句のふるまいは副詞的修飾の本質を示唆する重要な事例のひとつである。

また、連体修飾関係では「ほど」の〈極度〉という意味は必須ではない。

- (4) a. 春夫は空腹感を抑えるほどの食事をした (連体修飾関係)
 b. ??春夫は空腹感を抑えるほど食事をした (副詞的修飾関係)

(4) b. は〈極度〉の解釈がホド句と主節事態が関係することによって生じていることを示している。したがって、「ほど」に特徴的だとされた「非常の程度」や「穴が開くほど見つめた」のような誇張表現についても「ほど」の語彙の意味だけでは捉えきれないことが予想される³⁾。

3. 主節とホド節の意味的關係

3.1. 事態間の連鎖關係

本節では、主節とホド節の意味的關係を観察していく。まず、主節が表す事態を E1 とし、ホド節が表す事態を E2 としたとき、E1 と E2 には「E1 によって E2 が引き起こされる」というような事態間の連鎖關係が認められる（指標は分離不可能所有關係または同一指示を表す）。

- (5) a. 冬美 *i* が声 *i* が暖れるほど叫んだ
b. ??冬美 *i* が足首 *i* を骨折するほど叫んだ

(5) a. の文に現れたふたつの事態をみると、「冬美が叫ぶ」という事態 (E1) が結果的に「(冬美の) 声が暖れる」という事態 (E2) を引き起こしたという關係を読み取ることができる。一方、(5) b. では「冬美が叫ぶ」という事態 (E1) が結果的に「(冬美が) 足首を骨折する」という事態 (E2) を引き起こしたという關係を読み取るとは困難である。したがって文全体の許容度も下がる。

(5) b. の非文法性はホド句単独の問題ではない。その証拠に、次の (6) a. では「足首を骨折するほど」は適切な構文を構成する。

- (6) a. 冬美 *i* が足首 *i* を骨折するほどひねった
b. ??冬美が春夫 *i* が足首 *i* を骨折するほどひねった

(6) a. では「冬美が (足首を) ひねる」という E1 が結果的に「(冬美が) 足首を骨折する」という事態 E2 を引き起こしたと解釈することができるが、(6) b. ではそのような關係は解釈できない。「冬美が (足首を) ひねる」という E1 によって「春夫が足首を骨折する」という E2 が引き起こされたとは現実には考えにくいからである。しかしながら、主節の主語とホド節の主語が一致していなければ關係が成立しないわけではない。次の (7) ではホド節主語と主節主語の一致性にかかわらず、どちらも文法的である。

- (7) a. 秋絵が隣で見ていた春夫が吐き気を催すほどトンカツを食べた
b. 秋絵 *i* が *pro_i* 吐き気を催すほどトンカツを食べた

このように、ホド構文の成立に関わるのはホド句が表す事態が主節の事態との連鎖關係によって引き起こされるという關係が認められるかどうかであると考えられる。

3.2. 非常なあり方

E1 と E2 の間に認められる連鎖關係は必要条件にすぎない。この連鎖關係にはさら

に、E1が尋常ではないあり方で実現したことが結果的にE2を引き起こすことになるという関係が認められる必要がある。つまり、「E1のあり方が非常なあり方だ」と解釈されなければならない。例を挙げて検証しよう。

- (8) a. 秋絵が脚が痙攣するほど走った
- b. ??秋絵が脈拍がわずかに上がるほど走った

(8) a. b. はともに「E1が結果的にE2を引き起こす」という関係にある。しかし、(8) b. のE2「(秋絵の)脈拍がわずかに上がる」がE1「秋絵が走る」という事態が非常なあり方で行われたことによって引き起こされたとは考えにくい。E1が通常のあり方で実現すればごく自然にE2は引き起こされうると考えられる。一方(8) a. のE2「(秋絵の)脚が痙攣する」というのは「秋絵が走る」という事態が通常のあり方で行われれば自然と起こりうるものとは考えにくい。E2を引き起こすにはよほど尋常ではないあり方(非常に激しい勢いで走った／非常に長い距離を走った)でE1が実現したと考えなければ前節で指摘したE1とE2の連鎖関係も想定できない⁴⁾。以下、このような対照性を見せる類例を挙げる。

- (9) a. 夏子が気を失うほど焼酎を飲んだ
- b. ??夏子が頬がほんのり色づくほど焼酎を飲んだ
- (10) a. 冬美が祖父からパソコンが1台買えるほどお年玉をもらった
- b. ??冬美が祖父から駅弁がひとつ買えるほどお年玉をもらった
- (11) a. 聴衆が会場からあふれるほど来た
- b. ??聴衆が空席が残るほど来た
- (12) a. 春夫が扉をペンキが剥げるほど擦った
- b. ??春夫が扉を埃が落ちるほど擦った

(8)～(12)の各b.文のE2は、それを引き起こすE1が普通のあり方で実現していると想定できる事態であり、ホド句と主節の関係が不自然に感じられる。

奥津(1986)は「ほど」が程度スケールのなかでも特に高い程度を表すとしてこれを「非常の程度」と呼んだが、何を非常と判断するかは言語外の問題であるとしている。

- (13) もっとも、何が通常で何が非常かは、言語の形からは決められない。「死ぬ」が非常で、「死なない」が通常だとは必ずしも言えない。

(7) 弾丸が6発あっても死なないほど頑健だった。

この補文の述語は「死なない」であるが、補文全体(＝ホド節：引用者注)は非常の事柄を表している。非常の程度を示す「ほど」の記述について、補文の制限を明示しなければならないが、これはもはや言語学の枠を越えた問題であ

何が非常なあり方であるかの判断は言語外世界の経験的問題であるが、判断の基準と非常さの値の評価は構文内の意味的關係として捉えられるものであると本稿は考える。非常かどうかの判断は判断基準となる事柄が設定されてこそできることであり、(13)の引用文中の例において、ホド節が「非常の事柄」と捉えられるのは主節の事態との関係からに他ならず、奥津が例証しようとしたことは本稿が(5) b. と(6) a. で示したことと同じことである。前述したように、ホド句の性質はそれ単独では判断できず、その基準となるものは主節の事態とホド節の事態との意味的關係である⁵⁾。

以上の議論から、ホド構文の主節とホド句の間には次のような意味的成立要件が課せられていると考えられる。

- (14) 主節が表す事態 E1 とホド節が表す事態 E2 との間に [E1 のあり方が非常であることが結果的に E2 を引き起こす] という連鎖關係が認められること

ここで、この成立要件が、ホド構文が言語形式として因果關係を表すことを意味するものではないことに注意されたい。また後述するように、E2 の実現に関する真偽値も不問である。これはあくまでも主節事態とホド節の事態との間に想定されることが要求される連鎖關係の認知の問題である。

3.3. ホド節事態の実現性と誇張的用法

ホド構文は主節が表す事態またはその構成要素と修飾關係を結ぶ命題内修飾成分である。したがって、ホド節がひとつの事態を表していても、その事態の実現性は主節事態の実現とは独立しているものと考えられる(丹羽 1992 の議論も参照)。このような性質から、ホド構文ではホド節の事態の実現性は要件から外れる。以下の例からも分かるように、ホド節の事態は実現してもしなくても構わない。

- (15) a. 夏子が入院するほど痩せたので、春夫が病院にお見舞いに行った
 b. 夏子が入院するほど痩せたが、結局夏子は入院しなかった
- (16) a. 秋絵が書斎の床が抜けるほど古本を買ってきたので、床の補修工事が必要だ
 b. 秋絵が書斎の床が抜けるほど古本を買ってきたが、結局床は抜けなかった
- (17) a. 冬美が運動靴がボロボロになるほど走ったので、運動できる靴が一足もなくなってしまった
 b. 冬美が運動靴がボロボロになるほど走ったが、結局運動靴はボロボロにならなかった

(15)~(17)のホド節「入院する」「書斎の床が抜ける」「運動靴がボロボロになる」とい

う事態は現実には実現しうる事態であるが、その実現は文の文法性には影響しない。そこで、現実には実現しそうな事態がホド節に現れることも可能になる。

- (18) 冬美がそのニュースを聞いて目玉が飛び出るほど驚いた
- (19) 夏子が胃袋が張り裂けるほど焼き肉を食べた
- (20) 秋絵が頭から湯気が出るほど怒った

ホド節の事態が実現しなくても、さらには現実には実現しそうな事態でも構わないという特徴は、ホド節の事態が主節の事態と〈極度〉の修飾関係を結ぶために比喩的に参照されていることを示している。このとき、(14)に示したホド構文の成立要件 (E1 の非常のあり方による E1 と E2 の連鎖関係) が(18)～(20)のような比喩的なホド構文においても依然機能していることに注意されたい。構文の連鎖関係として含意される「E1 が非常なあり方であることによって結果的に引き起こされた E2」が現実には実現しそうな事態であることで、ホド句による〈極度〉を表す副詞的修飾関係は比喩的誇張表現へと拡張する。慣用的なホド句も次のような比喩的に誇張された表現であることが多い。

- (21) 春夫が部長の自慢話を耳にタコができるほど聞いた
- (22) 夏子がワールドカップのチケットを喉から手が出るほど欲しがった
- (23) 秋絵が息子にクルマに気をつけるようにと口がすっぱくなるほど言った

4. ホド構文とマデ構文

一方、ホド構文と似た性質を持つ形式にマデ構文がある。マデ構文でも「まで」が補部を取って副詞的成分マデ句を作り、主節事態を修飾限定する。

- (24) 夏子が足にマメができる {ほど/まで} 踊った
- (25) 秋絵が吐く {ほど/まで} 焼酎を飲んだ
- (26) 冬美が平らになる {ほど/まで} 金属を叩いた

本節では、ホド構文とマデ構文の相違点を観察する。第一の相違点として、マデ構文は単一事象における動作様態の解釈(≒激しく、強く)を持たず、複数事象と解釈される。

- (27) a. 春夫が壁にヒビが入るほど壁を (1 回) 蹴った (動作様態解釈)
- b. 春夫が壁にヒビが入るまで壁を (?? 1 回) 蹴った (事象回数解釈)
- (28) a. 夏子が背中が赤くなるほど春夫の背中を (1 回) 叩いた (動作様態解釈)
- b. 夏子が背中が赤くなるまで春夫の背中を (?? 1 回) 叩いた (事象回数解釈)

第二に、マデ節は主節の非限界的事態の継続範囲を中立的に表すことができるが (cf. 松本 1997)、ホド節は同様の意味を表せない。

- (29) 夏子が成田に着く {?? ほど/まで} 寝た
(30) 秋絵は庭園を日が暮れる {?? ほど/まで} 散策した

第三に、マデ構文ではホド構文における [E1 が結果的に E2 を引き起こす] という連鎖関係は必要条件ではない⁶⁾。

- (31) a. 冬美が運動靴がボロボロになる {ほど/まで} 走った
b. 冬美が日が暮れる {?? ほど/まで} 走った
(32) a. 夏子が鍵が壊れる {ほど/まで} ドアを蹴った
b. 夏子が警備員が偶然通りかかる {?? ほど/まで} ドアを蹴った

第四に、マデ句の事態は主節事態とともに実現するという解釈しか許されない。つまり、マデ構文には比喩的誇張用法が見られない^{7) 8)}。

- (33) 夏子は入院する {ほど/??まで} 瘦せたが、結局夏子は入院しなかった
(34) 秋絵は書斎の床が抜ける {ほど/??まで} 古本を買ってきたが、結局床は抜けなかった
(35) 冬美は目玉が飛び出る {ほど/??まで} 驚いたが、結局目玉は飛び出なかった
(36) 夏子は胃袋が張り裂ける {ほど/??まで} 焼き肉を食べたが、結局胃袋は張り裂けなかった

以上の観察から、マデ句は主節事態における移動・運動の継続範囲または変化・はたらかかけの多回の生起の終了点を表すと考えられる。つまり、ホド句の事態が主節構成要素の修飾のために参照されているのに対して、マデ句は主節全体が表す事態を規定していると考えられる。構文的には、マデ構文には E1 と E2 の連鎖関係の読み込みが必要条件ではないこと、誇張表現の用法がないことがホド構文との顕著な差違といえる。

5. 結果構文

5.1. 結果構文のタイプと派生的用法

前節までの議論と少し視点をかえ、本節では日英語の結果構文の用法について概観する。英語の結果構文には構文の拡張的解釈としての比喩的誇張用法があるためである。

結果構文については日英語含めて数多くの研究があるが⁹⁾、その特徴は概ね次のようにまとめられる。第一に、結果構文は次のような構文構成を持つ (影山 2001 p.156(3)より)。

- (37) 英 語：主語＋動詞 [自動詞または他動詞] (＋目的語) ＋結果述語
日本語：主語 (＋目的語) ＋結果述語＋動詞 [自動詞または他動詞]

結果述語とは非対格自動詞主語または目的語位置の名詞句と二次叙述関係を構成する要素のうち、事態終結後の結果状態のサマを表すものをいう。日本語では専ら形容詞句・形容動詞句によって表される。(38)がその例である。

- (38) a. Mary painted the wall red. /メアリーは車を赤く塗った
(三原 2003 p.209(17a))
b. She was burned brown by the sun. /彼女は小麦色に日焼けした
(影山 2001 p.155(2) a)

第二に、日本語の結果構文では、結果述語が表すサマは述語動詞句の語彙の意味に含意されているか、その含意の延長と解釈されなければならない。

- (39) a. 花子がグラスを粉々に割った (Hasegawa 1998 p.34(8)a¹⁰)
b. 髪を {茶色に / *二束三文に / *粉々に} 染める (影山 2001 p.164(26)b)

日本語では、結果構文を構成する述語動詞句は結果状態を含意する変化動詞に厳しく制限されており、非能格自動詞や変化を含意しない他動詞では結果構文が成立しない。

- (40) a. *馬が丸太をスベスベに引きずった
b. *彼女は息子をあざだらけに蹴った
c. *騎手は馬を汗だくに走らせた
d. *彼らはその男を血まみれに殴った
(Washio 1997 p.6(18))

ところが、日本語の結果構文から見ると非常に興味深いことに、英語の結果構文では変化を含意しない動詞でも結果構文を構成することができる。

- (41) a. John pounded the metal flat. / *ジョンは金属を平らに叩いた
b. I knocked the enemy breathless. / *私は敵をフラフラに殴った
c. The planes flew the ozone layer thin. / *飛行機がオゾン層を薄く飛んだ
d. John ran his sneakers threadbare. / *ジョンが運動靴をボロボロに走った
(三原 2003 p.209(18)(19))

対応する日本語の結果構文がいずれも非文と判断されることを確認されたい。このように英語の結果構文では日本語では可能なタイプも不可能なタイプもともに成立可能である。このことを踏まえ、Washio (1997) は前者 (変化動詞による結果構文) を *Weak resultative* (弱結果構文)、後者 (非変化動詞による結果構文) を *Strong resultative* (強結果構文) と分類している (三原 2000 も参照)。日本語では弱結果構文のみが可能ということになる。

英語の強結果構文には動詞と結果述語の間に項ではない名詞句を要求するといった構文的特点が見られる。また、変化を含意しない動詞が結果述語の表す結果状態を表すという意味的特点から、さらに派生的な用法が生じる。影山 (2001 p.172) の言説を引用する。

(42) 結果構文という名称を文字通りに受け取れば、「行為の結果」を表わすということのだが、派生的な結果構文の場合、実際に変化した結果よりもむしろ、「それほどまでに」という強調表現として用いられることもある。(中略) このような比喩的な用法が慣習化すると、結果述語が強調副詞に変貌することがある。

(49) a. I was bored to death. (死ぬほど (たいへん) 疲れた)

b. He talked himself blue in the face. (顔が青くなるまで (疲れはてるまで) いつまでも) シャベリ続けた

ここで注目すべきことは、英語の結果構文が比喩的誇張表現に派生するということ、そして、はしなくも例文の日本語訳にホド構文とマデ構文が用いられているということである。同様の言説を三原 (2003) から挙げておく (カッコ内も三原)。

(43) a. She kicked her son black and blue. (息子があざだらけになるまで蹴った)

b. They beat the man bloody. (男が血まみれになるまで殴った)

(三原 2003 p.207(12))

影山と三原は日本語話者として英語の強調表現に対応する自然な表現を用いたものと推察されるが、後述するように、この言説は本稿にとって極めて重要である。

英語の結果構文の派生的な誇張用法については他にも同様の指摘がある。Goldberg (1995) は(44)のような例を行為が過剰であったことを表現する *hyperbole* (誇張法) と分析している (p.184)。また、Jackendoff (1997) も(45)のような例を、結果構文の統語形式をとったイディオムの強調表現であると位置づけている (p.552)。

(44) The joggers ran the pavement thin. (Goldberg 1995 p.184 (35))

(45) Dean laughed/danced himself crazy/silly/to death/oblivion.

(Jackendoff 1997 p.552 (92))

Miyata (1999) は、結果構文には変化結果が実現したという文意の通常解釈 (literal reading) と動作のあり方を表わすために変化結果を例示する比喩的解釈 (figurative reading) があること、そしてその2つの解釈が動詞分類 (結果動詞 result verb / 様態動詞 manner verb, cf. Rappaport and Levin 1998) および結果構文のタイプ (結果志向の結果構文 result-focused resultative / 様態志向の結果構文 manner-focused resultative) に対応していることを指摘している。さらに Miyata は比喩的解釈を現実的に実現しうる結果を表す程度読み (degree reading) と現実的には実現しそうでない結果を表すメタファー読み (metaphorical reading) に大別する。

- (46) a. He cried his eyes out (for an hour/*in an hour).
b. He cried his eyes red (for an hour/in an hour). (Miyata 1999 p.30 (19))

(46) a. はメタファー読み (泣いて目が出た)、(46) b. は程度読み (激しく泣いた) または通常の解釈 (泣いた結果、目が赤くなった) である。日本語には強結果構文がないので、いずれも結果構文としては表すことができない。

- (47) a. *彼が目を外に泣いた
b. *彼が目を赤く泣いた

また、英語の強結果構文に対応する日本語の表現に「押し開ける」などの複合動詞がある (Hasegawa 1998)。これは変化を表す後項動詞を導入して弱結果構文を成立させるものであるが、事実上強結果構文に対応する。ただし、その解釈はあくまでも強結果構文の通常解釈に留まり、比喩的解釈は表せない。

- (48) a. ?*花子が金属を平らに叩いた (Hasegawa 1998 p.34(8)b)
b. 花子が金属を平らに叩き伸ばした (同 p.35(9)a)
(49) a. *彼が目を泣き出た
b. 彼が目を赤く泣き腫らした (通常解釈: 泣き腫らした結果目が赤くなった)

以上、先行研究による研究成果の検討から、次のような知見を得ることができる。

- (50) a. 英語の結果構文には弱結果構文と強結果構文の2種類のタイプがあるが、日本語の結果構文には強結果構文がない。
b. 英語の強結果構文には派生的用法があり、強調・誇張表現として用いられるが、これに相当する意味は日本語の結果構文および複合動詞では表せない。

この知見を受け、次に問題となるのは英語の結果構文ではなぜ動詞が含意しない変化結果を結果構文で表すことができるのか、そして強結果構文がない日本語では英語の誇張表現にどのように対応しているかという問題である。

6. 〈使役行為〉のスキーマ：構文的意味による意味の拡張

結果構文、特に英語の強結果構文についてはさまざまな観点からの分析が提示されているが¹¹⁾、前節末の問題に対する回答として、本稿では認知文法からのアプローチをとる西村（1998）の分析を援用したい。西村（1998）は前述(38)(41)(43)～(46)など、全ての結果構文に認められる認知的連鎖関係を捉える分析を提示している。

西村は結果構文には認知的基盤として〈使役行為〉という意味スキーマ（schema）が導入されていると主張する。〈使役行為〉のスキーマは次のような意味構造を持つ。

- (51) W（主語）が意図的に遂行する（述語動詞の表す）行為 X の直接の結果として、Y（目的語）に（結果述語の指定する）変化 Z が生じる（西村 1998 p.180）

西村（1998）は結果構文の基盤に(51)を設定することで英語の結果構文の意味的拡張や構文的特異性を統一的に説明できると主張している。その言説は本稿での議論にとって非常に示唆的なので、長くなるが引用する。

- (52) 英語の結果構文では、この構文外での用法では特定の対象の存在すら前提としない行為を表す動詞（e.g. shout）であっても述語動詞になりうることと、その際、目的語の選択に対して一見奇妙とも思われる制約が働く場合（自動詞文で再帰代名詞が要求されること：引用者注）があることも、この構文の意味構造が上記（＝(51)：引用者注）のようなものであると考えれば、何ら不思議ではなくなる。通常は対象の存在を含意しない行為を表す動詞が結果構文に生じうるのは、その行為が（行為者本人を含む）誰かあるいは何かに影響を及ぼすような、まさに通常とは異なる（激しく、極端に、などの）仕方で遂行されると解釈される場合、言わば、その動詞の意味が〈使役行為〉を表すように拡張される場合にほかならない。（西村 1998 p.181 波線は引用者、以下同様）

西村の分析の要点は、英語の結果構文は〈使役行為〉という認知的連鎖関係を基盤としていること、それによって動詞が基礎行為 X の動作しか意味しなくても結果構文が成立すること、その際には基礎行為 X のあり方が極度であると解釈されること、そして比喩的誇張用法もこの連鎖関係の枠内にあるということである¹²⁾。

西村の分析は結果構文の性質を〈使役行為〉という認知的スキーマから統一的に説明

しようとするものであるが、それはすなわち強結果構文における比喩的誇張用法をも同一の枠組みで捉えることに他ならない。そして、誇張用法に関する言説にはふたたびホド構文が現れる。

- (53) a. talk someone's ear off (西村 1998 p.191(45))
b. eat someone out of the house (同 (46))
c. これらのイディオムでは、動詞の表す行為の程度や様態がいかに極端であるか(「うんざりするほどしゃべりまくる」、「大変な大食いである」)を強調するために、(そのような行為の結果「聞き手の耳が取れてしまう」、「ある人(親や飼い主など)が家を出て行く(つまり家や財産を手放さなければならなくなる)」という)〈使役行為〉解釈が利用されているのである。(同)

前述(50)で指摘したように、このような結果構文の用法は日本語にはない。しかし、本稿3節で提示したホド構文の意味的成立要件(14)はこれに相当する意味的性質と考えられる。

- (54) 主節が表す事態 E1 とホド節が表す事態 E2 との間には [E1 のあり方が非常であることが結果的に E2 を引き起こす] という連鎖関係が認められること (= (14))

日本語では複合動詞という形式が強結果構文に相当する。しかし、複合動詞は強結果構文から派生された比喩的誇張用法までには対応できない。一方、本来的には副詞的修飾関係であるホド構文では、〈極度〉の修飾関係を構成するために主節とホド節との間に「非常なあり方による事態間の連鎖関係」という意味的要件を持つ。ホド構文にみられるこの意味的性質は〈使役行為〉スキーマを利用する英語の強結果構文における比喩的誇張解釈と概念的に通底するものと見なすことができる。このように、強結果構文がない日本語ではホド構文が強結果構文の誇張用法に表現上対応する。しかしそれは単に表現レベルの偶然の邂逅ではなく、両者の構文的意味の並行性に起因した現象であると考えられる。

7. おわりに：強結果構文と日本語の副詞的構文の接点

最後に、本稿の議論の総括と今後の課題設定を2種類の構文を検証しつつ行いたい。

英語の強結果構文による比喩的誇張用法とホド構文による〈極度〉の修飾関係による誇張表現は構文として共通した意味スキーマを持っているというのが本稿の見解である。マデ構文も類似した性質を持つと考えられるが、これは比喩的用法には対応しない。

- (55) a. 夏子が涙が出る {ほど/??まで} 喜んだ (程度読み)
 b. 春夫が目玉が飛び出る {ほど/??まで} 驚いた (メタファー読み)

マデ構文は通常解釈の強結果構文に対応すると思われるが、マデ構文には主節事態とマデ句補部事態の連鎖関係がなくても成立するものがあるので注意が必要である。

- (56) 冬美が血まみれになる {ほど/まで} 痴漢を殴った (連鎖関係あり)
 (57) 冬美が偶然警官が通りかかる {??ほど/まで} 痴漢を殴った (連鎖関係なし)

両者の構文的性質の相違、マデ構文内のさらなる考察については今後の課題である。

英語の強結果構文が、基盤となる〈使役行為〉のスキーマを利用することで結果構文を構成し、それが程度表現としての比喩的誇張表現に拡張しているものであるのに対して、ホド構文は〈使役行為〉のスキーマに相当する構成要件を持つことで〈極度〉の副詞的修飾関係を成立させ、それが誇張表現に拡張しているものである。本稿では、意味スキーマの観点から両構文の意味的並行性を指摘したが、両者の構文としての構造や機能の違いを捨象して本稿の指摘から短絡的に両者を同一視することが、期待されるべき結論であるとは思われない。

西村 (1998) が言うように、認知的な意味スキーマを共有する場合でも、その構文的実現は言語個別的である。言い換えれば、言語間で異なる構文がひとつの意味スキーマを共有することがありうるということである。そういった点で、本稿で示した日本語のホド構文と英語の強結果構文の意味的性質の違い (および日本語に強結果構文がないという事実)、両者の認知的意味スキーマと比喩的誇張表現としての並行性といった問題は、単に表現様式の問題に留まらず、比較構文論的考察にも発展しうるものであり、本稿の議論はそのような方向性のもとに位置づけられるものと考えられる¹³⁾。

注

- 1) このとき「ほど」は補部を取らなければ現れず、また補部に現れる節も「ほど」の補部としてでなければ文中には現れない (奥津 1986 など)。

(i) 夏子が {病気になるほど/*ほど/*病気になる} 働いた
 本稿では「ほど」の品詞性については特に考慮しない。また、ホド句補部には節以外にも名詞句・形容詞句・指示詞なども現れるが本稿では扱わない。奥津 (1986)、丹羽 (1992)、井本 (2000a、2000b) を参照。
- 2) 先行研究における副詞的修飾の概念規定については矢澤 (2000、2003)、加藤 (2003) などを参照。
- 3) 「ほど」の用法を統一的に捉える概念の提示や「くらい」「ばかり」との相違などの問題は本稿の関心の外にあるが、それはアプローチの違いに帰する問題である。
- 4) 川端 (2002) が挙げた例が適格であれば、本稿の見解に対する反例になる。

(i) 疲れないほどにがんばれ。(川端 2002 p.44(22a))
 しかし、本稿の筆者にはこの例文は不自然であり、奥津 (1986)、丹羽 (1992) が指摘しているように、「低程度」を表すためには「ほど(に)」を「程度に」に置き換える必要がある。次の奥津の例も参照されたい。

(ii) a. {ぶっ倒れる／??ぶっ倒れない} ほど練習しろ (奥津 1986 p.57(10)1)

b. {病気になる／??病気にならない} ほど勉強した (同(10)2)

川端はホド節がスケール上において「自由に程度の値を設定できる (p.40)」とするなど、いくつかの点で本稿とは異なる見解を示している。川端論文については田中 (2003) に詳しい検討があるので参照されたい。

5) その認定が言語外知識に立脚していることは本稿も否定しない。

6) これをマデ構文全体の性質とみるか、連鎖関係の有無によってマデ構文を分類するかは重要な論点であるが、これについては別稿で検討したい。

7) 影山 (2001) にはマデ構文の比喩的誇張用法を示唆する記述があるが、特に否定はせず保留とする。

(i) 彼女は涙が枯れるまで泣いた (影山 2001 p.168(36)a)

8) この他にもマデ節は名詞句や形容詞を修飾できない、マデ節には動詞タ形が現れないといった相違点があるが、これについてのさらなる記述および考察は別稿に譲る。

(i) a. 冬美が [[腰を痛める {ほど／??まで} の] [重い] 荷物) を持ち上げた (名詞句修飾)

b. 冬美が [[腰を痛める {ほど／??まで} 重い] 荷物) を持ち上げた (形容詞修飾)

(ii) 夏子がお腹を壊して入院した {ほど／*まで} かき氷をたべた

なお、「までに」はホド句と同様に〈極度〉の含意を持つ修飾関係を構成する (奥津 1974 など)。ただし、ホド句と「ほどに」がほぼ同義であることに比べると意味・用法のズレが大きいことなどから本稿ではマデ句と「までに」を同一視しないでおく。

9) 結果の修飾関係からの論考としては仁田 (1983, 2002)、矢澤 (1983, 2000) など、日本語の結果構文研究としては影山 (1996, 2001)、Washio (1997)、Hasegawa (1998)、三原 (2000, 2003) などが代表的な論考である。英語の結果構文については Jackendoff (1990)、Carrier and Randall (1992)、Goldberg (1995)、Levin and Rappaport Hovav (1995) などが代表的な論考といえる。

10) 原文がアルファベット表記の場合は適宜漢字仮名まじり表記に改める。以下同様。

11) 統語的観点からは Hasegawa (1998)、三原 (2000, 2003)、概念意味論的観点からは Jackendoff (1990)、影山 (1996) などの分析が提案されている。

12) 西村は〈使役行為〉において動詞が表わす基礎行為 X とスキーマが含意する結果状態 Z を結ぶために極端なあり方という解釈が生じる可能性を示唆している。結論は保留されているが本稿もその見解を支持したい。

13) たとえばセルビア語でも強結果構文は不可能で、マデ構文に相当する構文で表される (三原 2003)。セルビア語話者ドラガナ・シュビツァ氏 (個人談話) によると、セルビア語には弱結果構文もなく、副詞かマデ節相当形式 (dok ...) で表現する。dok 節事態の実現はキャンセルできず、メタファー読みも許されない。

(i) a. Nacuko je šutirala vrata dok ih nije polomila. (夏子が壊れるまでドアを蹴った)

b. *Nacuko je šutirala vrata dok ih nije polomila, ali ipak ih nije polomila.

(* ~結局ドアは壊れなかった)

ホド構文には toliko da... (so much that...) が対応するが、ここでもメタファー読みは許容されない。メタファー読みを伴う比喩的誇張表現には次のような構文が対応する。

(ii) Toliko je bio gladan, da samo što nije pojeo celu gibanicu.

ここでの samo što nije は日本語のいわゆる「～んばかり」に相当する。このように比較構文論的視点では結果構文とともにマデ構文・ホド構文などの副詞的構文が考察の射程に収まることになる。

参考文献

Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) The argument structure and syntactic structure of resultatives. *Linguistic Inquiry*, Vol.23, No.2.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions*. The University of Chicago Press.

井本 亮 (2000a) 「否定と共起した [指示詞+ほど] の用法について」『筑波日本語研究』第 5 号、筑波

大学大学院文芸・言語研究科日本語研究室

- 井本 亮 (2000b) 「連用修飾成分「ほど」句の用法について」『日本語科学』8号、国立国語研究所
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic structures*. MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1997) Twistin' the night away. *Language*, Vol.73, No.3.
- Hasegawa, Nobuko (1998) The syntax of resultatives. 平成9年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告書(2A)
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版
- 影山太郎 (2001) 「結果構文」影山太郎編『動詞の意味と構文』大修館書店
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- 川端元子 (2002) 「程度副詞相当句(節)「Pほど」について」『日本語教育』114号、日本語教育学会
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaaccusativity*. MIT Press.
- 松本 曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」中右実編、田中茂範・松本 曜著『空間と移動の表現』研究社出版
- 三原健一 (2000) 「結果構文く総括と展望」『日本語・日本文化研究』第10号、大阪外国語大学日本語講座
- 三原健一 (2003) 「普遍文法と日本語——結果構文を題材として——」北原保雄監修・編『朝倉日本語講座5文法Ⅰ』朝倉書店
- Miyata, Akiko (1999) Two types of resultatives. *Tsukuba English studies*, Vol.18.
- 西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」中右 実編、中右 実・西村義樹著『構文と事象構造』研究社出版
- 仁田義雄 (1983) 「結果の副詞とその周辺——語彙論的統語論の姿勢から——」渡辺 実編『副用語の研究』明治書院
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』第44巻第13分冊、大阪市立大学文学部
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』大修館書店
- 奥津敬一郎 (1986) 「形式副詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本 武著『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1998) Building verb meanings. Butt, Miriam and Wilhelm Geuder eds., *The Projection of arguments*. CSLI Publications.
- 田中聡子 (2003) 「「くらい」の意味特徴——「ほど」との比較を中心に——」『言語と文化』第4号、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻
- Washio, Ryuichi (1997) Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6.
- 矢澤真人 (1983) 「情態修飾成分の整理——被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察——」『日本語と日本文学』第3号、筑波大学国語国文学会
- 矢澤真人 (2000) 「副詞的修飾の諸相」仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人著『日本語の文法1文の骨格』岩波書店
- 矢澤真人 (2003) 「副詞の機能」北原保雄監修・編『朝倉日本語講座5文法Ⅰ』朝倉書店

付記：本稿は平成16年度科学研究費補助金(若手研究(B)研究代表者：井本 亮、課題番号16720100)による研究成果の一部である。

(いもと りょう 福島大学経済学部国際地域社会講座助教授)